大正十五年十一月十日印刷納本
大正十五年十一月十日發行
〔毎月三回十ノ日發行〕

學藝講演通信社パンフレット

今日の話題

回教徒の新世界

伊藤龜雄

1926 No. 30

エジプトの愛國者であつた、アラビ、パシヤが英國新聞記者ヘンリー、ルシーに示した短いセンテンスに、「時は來るであらう」と云ふ一句がある。

「時は來るであらう！」この短い一句の中には長い間白人に屈從し奴隷の如き生活に苦しんだ、不幸なる民族の熱烈なる要求と確信が滿たされて居る。人道と正義に依つて、長い間專横と優越に他民族を壓制した、白人の頭上にも、やがては、正しい審判の日は近づいた。

私達はナイルのエジプト、ビラミツトのエジプトは餘りフインクスのエジプト、クレオパトラの鼻の高さまでも知り過ぎて居る。否クレオパトラのエジプトは、ナポレオンにも知つて居る。夫れにもかゝわらず、更生のエジプトに就いては、回教徒のエジプトに就いては殆んど知る事が少い。

舊い勢力と結びつくものは、其勢力の滅亡と共に自滅す。一國内に於ても、或は又國際上に於ても然りである。未來に生きるものは新らしい力に結びつく。新らしい力には、眞實の意味に於ける自由と正義と人道の要求がある。この實現には幾多の尊き犧牲を要する。

同教徒の新世界！そこには我等の脈管とつながる何者かないであらうか。朝鮮を見よ！印度を見よ！支那を見よ！フイリツピンを見よ！

そこにも「時は來るであらう」と叫んだアラビ、パシヤの叫びが聞えないであらうか。

人類を愛するものは國家を愛する。國家を愛するものは人類の未來を思ふ。國家を愛する人類の未來を思ふ。

夫れ故に私は伊藤氏の本講演が、アフリカの回教徒の問題にあらずして、やがては私達の現實の問題として、多大の暗示を私達に與へるであらう事を信ずるものである。

學藝講演通信の使命――あらゆる文化を、一部の人に專有させずに、廣く一般國民に普及する事が、私達の年來の運動であります。

如何なる階級の人々たるを問はず、都市と山間僻地の區別なく、少々の費用と少々の時間で、文化の中心地に於ける名士の講演を、居ながらにして聞く事が出來、然もそれが永久的に印象せられ、保存せらるゝと云ふのがこの講演通信の使命であります。

平易にして理解され易く、特殊の課目に偏せず、政治、經濟、哲學、宗教教育、藝術等のあらゆる部門を網羅して、然もこれを說く人が、一部の人に限らず、英米獨佛は勿論、世界各國名士の講演と論文から其粹を取り、日本に於けるあらゆる名士の講演と論策とを、最も敏活正確に報道するもの、本通信の外に有りませぬ。

翼くば大方の士が、この趣旨に御賛同下さつて、御入會あらん事を伏して御願ひ申上ます。

編者白

最近の伊藤龜雄氏

目次

一、百年かゝりで發見
二、白人を目標として
三、變り行くアフリカ
四、改宗せる英國貴族
五、變色せぬ萬年信仰
六、トルコの婦人運動
七、白人帝國主義の禍
八、名義だけの獨立國
九、變つた押しかけ婿
一〇、英土間の繫爭問題
十一、地の利も人の和も
十二、自主權を要求して
十三、擡頭せる民族主義
十四、國際上の水平運動

回教徒の新世界

（國民講堂講演に依る）

國民新聞
外報部長　伊藤龜雄

一、百年がゝりて發見

ナポレオンはさま〳〵のエピソオドを後の世に殘した。その中でも、彼のエヂプト遠征中におけるエピソオドくらゐ、回教徒の擡頭に注意を拂ふものにとつて、時節柄多くの感興と暗示を與へるものはあるまい。

話は德川の世盛りといはれた十一代將軍家齊の時代に遡る。即ちナポレオンがエヂプト遠征を企てたのは、家齊が將軍になつてからちやうど十二年目に當る寛政十年（一七九八年）であつた。彼は何の目的を持つてエヂプト遠征を企てたか。

一言にしていへばインドは即ち英國である。インドは英國なしでも立つて行き得るが、英國はインドなしには立つて行き得ない。ナポレオンはよく此の間の消息に通じてゐた。即ち彼は英國征服の前提としてインド征服を企つべく、インド征服の前提としてエヂプト征服を企てたのであつた。此の意味においてナポレオンのエヂプト遠征は、英國インド及びエヂプトといふ三角中の一角に立つたのである。

ナポレオンは戰爭の天才であつたばかりでなく、學術的方面においても實に旺盛な研究心の持主であつた。例へば外

國と戰端をひらくやうな場合があると、彼はそれに先だち出來る限り其の國に關する多くの材料を集めた。そして彼みづから其材料によつて、こつ〳〵研究した。彼の研究は其の國の地理歷史より人情風俗にまで及んだ。後にはそれでも滿足が出來なかつたと見えて、大工に命じて運搬に便利な別誂への本箱を造らせ、それに必要な參考書をつめて戰場へ持つて行つたくらゐである。

かうした熱心な研究家がエヂプトへ行つだのであるから、彼がいち早く回教徒の勢力に眼を著けたのは決して不思議でない。シーザーやアントニーがエヂプトに入つて、先づクレオパトラの匂ひを嗅いだやうに、ナポレオンはエヂプトに入つて、先づ回教徒の匂ひを嗅いだ。

アレキンドリヤにおけるナポレオンの最初の仕事は回教の寺院へ參詣したことであつた。エヂプト遠征中におけるエピソオドといふのは、要するに、ただそれだけのことに過ぎない。併しキリスト教國であるフランスの軍司令官が上陸さう〳〵回教の寺院へ參詣したといふことは、回教徒に對して非常な衝動を與へずにはおかなかつた。

それはナポレオンが回教徒の寺院へ參詣した後のことであらう。彼は必要があれば何時でも回教に歸依する、といつたといふ說が博へられてゐる。これは小說かも知れぬが、いかにもナポレオンのいひさうなことである。兎も角、ナポレオンがあの時代において早くも、回教徒の勢力を認めたといふことは、彼の偉大さを實證する偉大な事實であらねばならぬ。

ナポレオンのエヂプト遠征は百二十五年前の史實である。それ以來、回教徒の世界にもいろ〳〵の變化があつた。然し白人がほんとうに回教徒の世界を發見したのは全く歐洲大戰後の出來事である。おくれたりとはいへ、發見は發見にちがひない。それにしても何といふ氣の永い人達だらう。

二、白人を目標として

人種的にいへば、世界において白人ぐらゐ、ひどい色盲はない、殊にアングロサクソン民族に至つては、病氣の程度が殆ど極端まで行つてゐる。それでもなほるならば結構だが、今のところ、なほる可能性十に一つもない。

白人以外、一切の有色種を認め得なかつたことは、白人にとつて非常におもしろからぬ結果を、招來する原因になつた。若し白人にして人種に色盲でなかつたならば、否、たとひ色盲であつたにしても、病氣の程度があれほどまでにひどくなかつたならば、現在、世界に存在する恐るべき不安の大部分は、恐らくは發生しなかつたであらう。

今を距る十餘年前、ヴアレンチン、チロールがタイムスに『印度の不安』を書き始めた頃までは、世界の不安はただ印度にのみ存在するものの如く信じてゐるものが多かつた。少くとも英國人の多數はさう信じてゐた。それが、それから何年もたゝないうちに、不安そのものの必ずしも印度の風土病でない實證がだん〳〵に現はれて來た。現に不安は回教徒の世界において盛んに白人を脅かしてゐる。汎回教主義が回教徒間の一大勢力になるかどうかは、今のところ全く疑問であるが然し回教徒間における民族的自覺がいよ〳〵顯著な事實となつて現はれて來たことは、何といつても白人に對する一大脅威である。モロツコにおいても、シリヤにおいても、若しくはモスールにおいても、白人は回教徒の反抗に會して、心から震ひあがつてゐる有樣である。然かも白人に對する回教徒の反抗は決して一時的の現象でない。回教徒に對する白人の横暴壓迫が久しきに亙つて、深刻であつただけ、それだけ白人に對する回教徒の反抗は今後さま〳〵の形になつて必ず繼續的に現はれて來るにちがひない。回教徒の民族的自覺と白人に對する回教徒の報復心とは、回教徒をして飽迄現狀打破の大芝居を打たしめねばやまないであらう。バートランド、ラツセルはアジヤに遊んで、かうした

機運の動きを視て歸つただけであつて、アジヤの將來に關して左の如き豫言を發表してゐる。即ちラツセルの豫言によればアジヤ諸國は今後五十年にして悉く獨立を得るであらうといふのである。五十年といふのは一體何を基礎にしていつたのか分らないが、ことによると、或は五十年かからないかも知れない。これももとより想像ではあるが。

それでもアジヤにおける回教國の運命に關しては、大體の想像はつく。たゞ今のところ輕々しく豫言を容さないのはアフリカにおける回教國の將來である。もとよりアフリカにもエヂプトの如く、すでに半ば以上、獨立を得た國もあるが、エヂプトを以て直ちに他を律することは出來ない。然しアフリカにおける回教國にも、すでに希望の曙光が見えて來た。アジヤにおける回教國に見るが如く、こゝにもまた回教徒の民族的自覺と白人に對する反抗心の顯著なる現はれが世界の驚異になりつゝある。アジヤにおける回教國の運命は、やがてアフリカにおける回教國の運命となるであらう。

新しい時代に舊式の民族主義などは全く無用である。侵略的民族主義利己的民族主義とダスが罵倒したヨーロツパの民族主義に對抗して我等は新しい時代にぴつたりと當てはまる新しい民族主義を創造せねばならぬ。

かうした大決心を以て世界の回教徒は一齊に振ひ起つた。勿論一齊と云つても時間的には前もあり後もあつた。然しそれは何れにしてもいゝ、そして回教徒の在る所そこには何人も輕卒に看過し得ない或るものが動いて居る。

それに就いて先づ第一に知つて居らねばならぬ事は世界における回教國の地位と回教の分布である。

回教徒の世界に於て最も重要の地位を占めて居るのは言ふまでもなくトルコである、トルコの全盛時代にはトルコ軍はウインの成内に迫つた形勢利あらずしてウインから退却はしたがそれでもあの廣いバルカンの全部は其後數世紀に亙つてトルコの領土であつた。

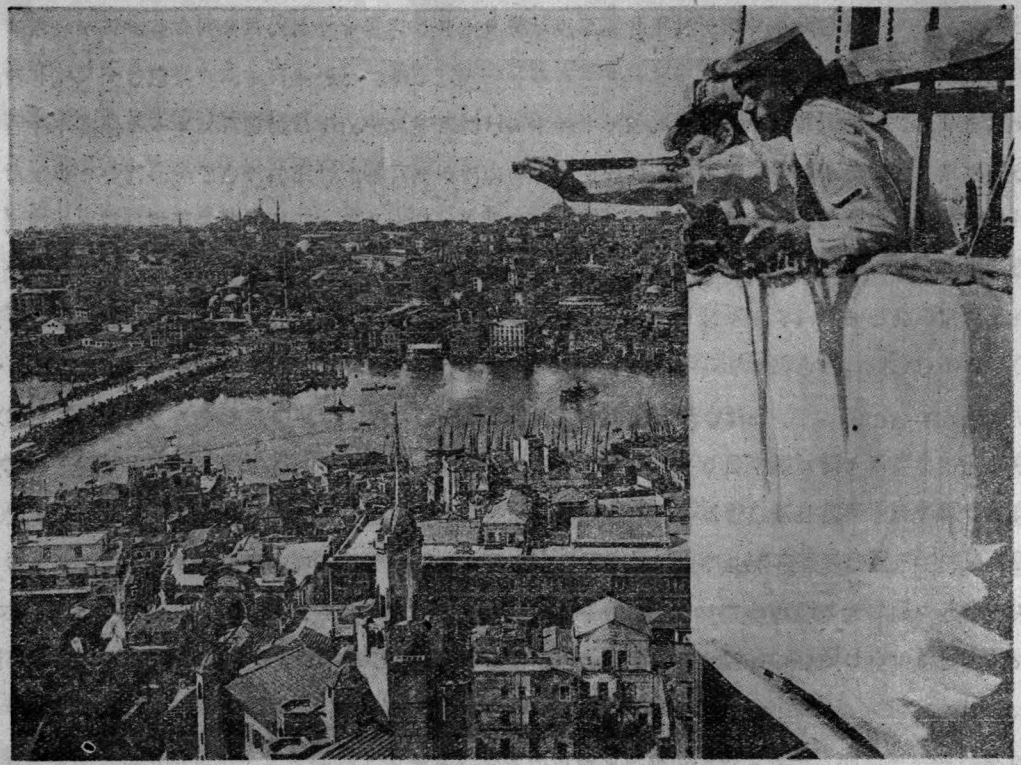
一八三〇年(天保元年)ギリシヤがロンドン條約により英佛露の三國から其の獨立を承認せられるまでトルコはバルカンに於けるたゞ一人の大地主であつた。

此の大地主をヨーロツパから放逐することは久しい間ヨーロツパの政治家によつて企てられた、大きな陰謀の一つであつた。それにはいろ〳〵の原因もあるが主なる原因はトルコが回教國であるといふにあつた。此の陰謀の裏面にヨーロツパの大國がバルカンに魔の手をのばそうと云ふ野心の潜んでゐた事は云ふまでもない。

コンスタンチノープルを京都としアンゴラを東京とする現代のトルコには二百五六十年前に於ける彼等の祖先の全盛時代にもまさつて溢れるばかりの覇氣と熱烈な愛國心が燃えて居る彼等がバルカン大地主からバルカンの一角に昔の面影を留めるに過ぎない、小地主になり下つた事は彼等にとつて非常な不幸であつた。然し新しい民族主義によりて更生た彼等としてはそんな事はさほどに大きな問題ではない。

其他近東にあつて獨立の機會を狙つてゐるものにシリヤ、バレスタイン、イラクヘヂヤズの諸國がある。即ちシリヤはフランスの委任統治の下にバレスタイン及びイラクヘヂヤス(メソポタミヤ)はイギリスの委任統治の下に置かれてあるのであるが此等はいづれも回教徒の國であるから甘んじて白人の制令に服從する筈はあり得ない。

英、佛の帝國主義が之等の地方を墳墓の地とすると否とは彼等が時代を觀て名譽の退却を行ふと否とによつて決定する。更に進んで東へ行くとそこにはペルシヤとアフガニスタンと云ふ二つの回教國がある。ペルシヤの隣にはまた七千萬の回教徒を抱擁するインドがある。インドの北に當るトルキスタンにも多數の回教徒が居る、回教徒の努力は更に東して支那の西北部に及んでゐる。其他南洋に於けるオランダ領にも亦多數の回教徒が居る、回教徒の努力はかくして全アジヤを其手に抱擁してゐる。



コンスタンチノープル府

三、變り行くアフリカ

太政官が廢されて日本に初めて內閣といふものゝ出來た明治十八年(一八八五年)頃のことであつた。その當時、英國の議會記者として有名であつた。ヘンリー、ルシーが東京を訪問した。そして彼は日本の歸りにセイロン島に立寄つてアラビ、パシヤをたづねた。アラビ、パシヤはエヂプトの愛國者であつた。彼は國民の間に非常に人望があつた。彼は外國人がエヂプトにおいて傍若無人の振舞をするのが癪にさはつてならなかつた。彼は陸軍大臣の地位にあるを幸ひに兵を擧げて攘夷を決行すべく起つた。然し彼の計畫はテル、エル、ケブルの一戰で散々に打ちこはされてしまつた。そして其結果はアラビ、パシヤの島流しとなり、英軍のエヂプト占領となつた。

ルシーがセイロン島にアラビ、パシヤをたづねたのは、それから六年ばかり經つた。後のことであつた。アラビは近頃英語を勉强しゐるといつて、自分でペンを執つて二三の短いセンテンスを書いて遠來の客に示した。そのセンテンスの一つに『時は來るであらう』といふのがあつた。

アラビはルシーの質問に對して自分はエヂプトへ歸る意思はないといつた。彼は其の理由を說明して、エヂプトは奴隷の國であるからだ、といつた。然し『時は來るだらう』といふ短い文句は、取りも直さずエヂプトの獨立を暗示したのであつた。彼はセイロンに在ること二十九年にして、一九一一年(明治四十四年)赦されてエヂプトへ還つた。然し彼は遂にエヂプトの獨立を見ずに死んでしまつた。

今のエヂプトはもはやアラビ、パシヤ時代のエヂプトでない。エヂプトがナイルのエヂプト、ピラミツトのエヂプト、スフインクスのエバシト、若しくはクレオパトラのエヂプトとしてのみ知られてゐた時代は已に過ぎ去つた。今のエヂ

ブトは更生のエヂプト、ナショナリストのエヂプト、そしてまた實に回教徒のエヂプトである。併しエヂプトの外にもアフリカには尙ほ多くの回教徒の國がある。チニスも其の一つである。アルゼリヤもその一つである。モロッコもその一つである。トリポリもその一つである。勿論、是等の諸國は今尙は依然として白人の治下におかれてゐる。彼等が白人の羈絆を脱するは果して何れの日にあるか。それは何人も確實に豫言することは出來ない。併し『時は來るであらう』そして其は必ず確實に來るであらう。

アジアとアフリカとは回教によつて緊く結ばれてゐる。而もアフリカにおける回教の勢力範圍はただに前記の諸國にとゞまらず中央アフリカから遠く南アフリカにまで及ばんとしつゝある。アフリカを擧げて回教と民族主義の國土になるのも、さう遠い將來ではあるまい。

四、改宗せる英國貴族

回教は國境を突破してどん〳〵弘まつて行く。これは頗る注意すべき事實である。そして回教は有色人種のみならず白人のあひだにさへ多數の信者を持つてゐる。現にバルカンには約四百萬の回教徒がゐる。勿論、此の中の大部分を占めてゐるのはアルバニヤ人であるが、一九〇八年（明治四十一年）オーストリーに併合されて外交上の大問題をひき起したボスニヤ、ヘルゼゴビナの如く、餘りトルコ臭くないところにさへ、白人の回教徒が少からず住んでゐる。たとへバルカンからトルコを追ひ出す事は出來ても、バルカンから回教徒を追ひ出すことは至難であらう。

然しそれよりも新傾向として注目すべきことは、英國人間における回教への改宗である。いふまでもなく英國は宗教國營の國である。ひとしくキリスト教徒であるに拘はらず、國教徒でないといふ單なる理由によつてカソリック教徒に

選擧權を與へなかつたくらゐの國である。今でさへ大法官（貴族院議長）になるのは新教徒に限られてゐるくらゐ窮屈極まる國である。併しかうした宗教國營の國にも、かうした宗教的不平等の存在が公然ゆるされてゐる不合理的な國にも回教は遠慮會釋もなく割り込んで行く。かうしてロンドンにも何時の間にも回教の禮拜堂が出來た。そこにはロンドンにゐるトルコ人其の他の回教徒が集まるばかりでない。英國生れの英國人で、そこへ禮拜に行きつゝあるものがいくらもある。彼等は必ずしも回教の歸依者でないかも知れぬ。然し彼等の中に熱心な改宗者のあることは否定し得ない事實である。

そればかりでない。回教徒の聖地メツカには折々英國人の巡禮者を見かけることがある。もつとも此等の巡禮者は東洋人に姿を變へて行くものが多いので、人の眼には立たないが、中にはヘツドレーといふ貴族の如く、英國人であることを堂々と名乘つてメツカ詣でを企てるものもないではない。ヘツドレーのメツカへ行つたのは今大正十四年の八月中旬であつた。實に、ヘツドレーは回教を信ずる英國貴族としてメツカ詣でを企てた最初の一人である。彼はヘヂヤズ王から特別の待遇を受けた。彼が他の多くの巡禮者とともに沙漠に露營した時など王は自分のベツドを彼に與へ、自分は地上に横臥して寢たほどであつた。

かうして回教はだん〳〵白人の間に弘まつて行きつゝあるトマスアーノルドのいつた如く、英國人は『好むも好まざるも回教の世界とともに往んでゐる』ばかりでない。彼等は英國生れの英國人の間に、熱烈な信仰を有する回教徒を發見する時代に住んでゐるのである。これが新時代の新傾向を語るものでなくて何であらう。

五、變色せぬ万年信仰

政治家はどうかすると、住々にして變色する。例へばボールドウイン内閣の藏相ウインストン、チヤーチルの如き、初めは保守黨から自由黨に轉じ、それから約二十年を經て保守黨に舞ひ戻つた變色黨の旗頭である。古いところでは保守黨から自由黨へ養子に行つたグラド、ストンといふ大先輩もゐる。それと同じく人の宗教的信仰もまた住々にして變色することがある。然し回教徒に限つてさういふことは絶對にない。徒等の信仰は決して浮氣でない。彼等の信仰はどこまでも眞面目であるいくら萬年新造でも、歳をとれば梅干婆さんになるが、回教徒の信仰こそは全くの萬年信仰である。これが回教と他の宗教との異なる一つの大きな點である。更に驚嘆すべきことは回教徒の結合力である。彼等は互に兄弟であるといふ堅い信念によつて結ばれてゐる。そして此の信念は國境を超越してゐる。彼等は實に徹底した相互扶助の體驗者である。

彼等は世界大戰の前にも幾たびか勇躍して護法愛國の第一線に立つた。而も彼等がほんとうに民族主義に撤底して來たのは大戰以後である。インドにおけるガンヂイの非協同運動があのやうに英國の脅威となつたのも、回教徒の協同が與つて大に力がある。斯うした大勢力を有する回教徒は世界にどの位ゐ存在してるか。回教徒ぎらひな白國人の統計によれば、世界における回教徒は總數二億二千七百萬に達するといふことである。そして此の中の約半分は英國の領土に住すんでゐる。現にインドだけでも約七千萬の回教徒を包容してゐる。

英國の領土以外における回教徒の分布は大體左の如くである。(單位一萬)

南部ヨーロツパ	四〇〇	ペルシヤ	九〇〇
アジヤ、トルコ(戰前)	一、五〇〇	アフガニスタン	五〇〇
ロシヤ(戰前)	一、四〇〇	印度支那及びシヤム	二〇〇

支那	一、二〇〇	トリポリ	二〇〇
南洋諸島	三、五〇〇	チュニス	二〇〇
エヂプト	一、二〇〇	アルゼリヤ	五〇〇
スーダン	四〇〇	モロツコ	五〇〇
アビシニヤ	五〇〇	リベリヤ	五〇〇
其他アフリカ各地	二、五〇〇		

精確なことは分らないにしても、大體の數字は略これによつて分かる。白人の計算であるから、これより多くとも少いことはあるまい。

回教徒は實に斯くの如く多數である。然も彼等は年々歳々、增加して行く。即ち回教徒のいふところによると、バグダードから南アフリカにかけて回教に歸依するものが年々百萬を下らないといふことである。アメリカの南端に位するケープタウンにさへ、現在二十以上のモスク（回教の寺院）があるに徵するも、回教の如何に驚くべき浸潤力を持つてゐるかが窺はれる

六、トルコの婦人運動

變る時には何もかも變る。そして速力の早い時勢は、變らぬもの若しくは變り得ぬものに一瞥をも與へずしてずんずん前きへ進んで行く。

世界は大戰の影響によつて一足飛びに二百年さきへ進んだ、といふ或るヨーロツパ人の言葉は、無論割引をして聞か

ねばならぬ。それにしても大戰後の世界が大戰前のそれに比して、大に變りつゝあることは否定すべからざる事實である。而もこれはひとりヨーロツパ若くはアメリカばかりでない。回教徒の世界にも、さま〳〵の變化が起つて來てゐる例へばトルコの如きは戰後他に率先して婦人を文部大臣に任命するといふ風說があつた。文部大臣に擬せられたのはトルコの政治家ドクトル・アドナン・ベーの細君でハリデ・ハノームの名によつて知らるゝ新しい女であつた。昨年の春、勞働黨の婦人議員ボンドフイールドが英國における最初の婦人次官に任命された時、頭のふるい連中は既得權でも侵害されたかの如く驚いたが、トルコにおいて婦人大臣の出來かゝつたのは、それよりずつと前だからおもしろい。

ハリデ・ハノームはトルコにおける婦人運動の第一線に起つてゐる。彼女が知識階級に屬する五百人の新らしい女達をかたらひ、婦人解放に關する請願をアンゴラ議會に提出したのはトルコの婦人運動史に特筆大書すべき事實であつた請願の內容は、婦人結婚年齡の引上け（トルコでは婦人は九歲、男子は十五歲に達すれば結婚し得ることになつてゐる）離婚手續の改正及び一夫多妻制度の廢止等であつて、トルコにありては家族制度及び社會制度の一大革命を意味する畫期的請願であつた。

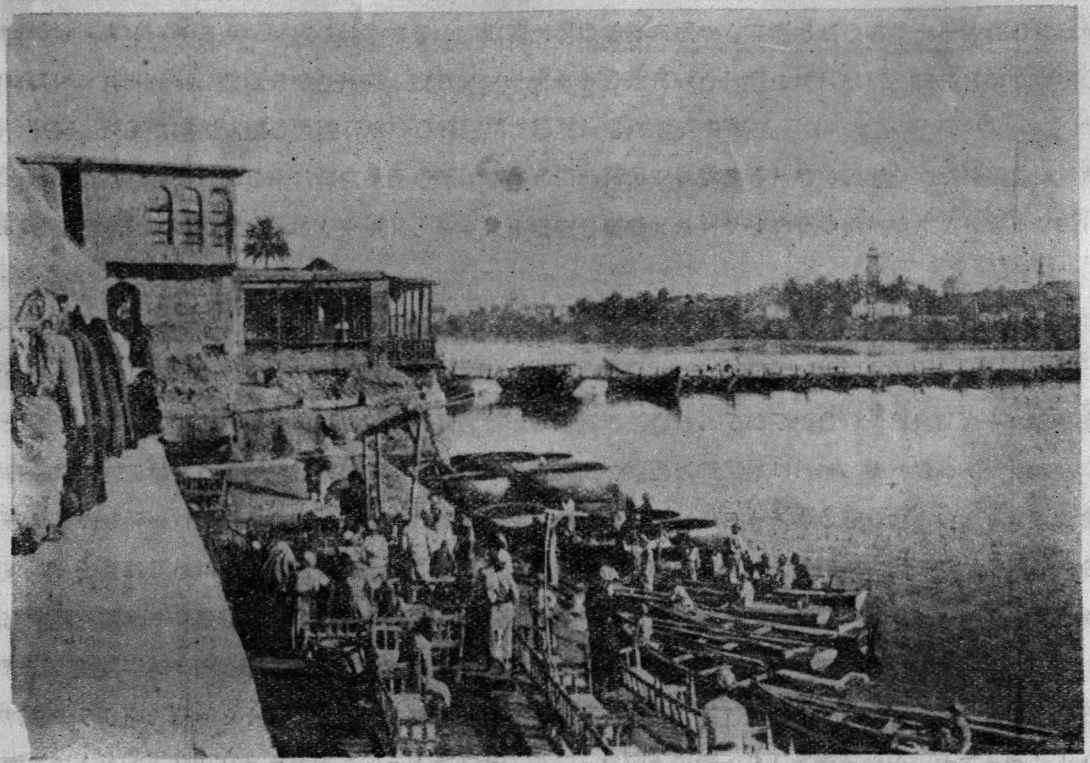
トルコ婦人の間にかうした運動の起つたのは決して不思議でないトルコは昔から男子の國である。孔子をして女子と小人は養ひ難しと嘆せしめたほどに、支那婦人の或るものが家庭において暴威を揮ふのと同じやうに、トルコにおいても婦人にして意想外の大勢力を持つてゐるものもないではない、然し大體からいへばトルコ婦人は謂ゆる解放されぬ婦人であつた。そこに婦人運動の起るべき原因があつた。そしてそれが戰後、世界的になつた新機運と相まつていよいよ具體化するに至つたのである。それはトルコにおける婦人大學生の增加を見ても分る。然かもトルコにおける婦人大學生は學問上において男子の競爭者になつてゐる。數はまだ多くないが、それでも一昨年の如きは、彼等の仲間から三人

の法學士を出してゐる大學がたつた一つしかない今日においてさへ既に此の通りである。今後大學の增設につれて、婦人大學生の增加するであらうことは容易に想像される。然し吾人は悠々と未來記を語つてゐる餘裕を持たない。吾人はこれより進んで、回教國に起りつつある若干の問題に關して概括的說明を試みるであらう。

七、白人帝國主義の禍

地中海が世界の問題であつた時代、バルカンが世界の問題であつた時代、それ等はもはや永久に歸らぬ過去の物語となつた。現代における世界の二大問題は、何といつても太平洋問題と近東問題である。

『近東及び世界の平和を脅かすものはドイツの希國主義ばかりでなくあらゆる帝國主義である』とは戰前における。アール教授の言である。此の言は、その前半即ちドイツの帝國主義に關する部分を除けば、そのまゝこれを現在の世界、殊に回教徒の世界に適用することが出來る。その中でも、英佛の帝國主義によつて絕えず平和を脅かされてゐるのは近東の回教國である。即ちトルコにしろ、ヘヂヤズにしろ、パレスタインにしろ、イラクにしろ、若しくはシリヤにしろ、問題のあるところには必ず英佛いづれかの帝國主義がある。近東に於ける不安、動亂、危難は取りも直さず白人帝國主義の所產であらねばならぬ。英佛の帝國主義がトルコを對象として最も露骨に表現されたのは一九一六年(大正五年)のシークス。ピコー協定である。そして此の協定がもとになつて、アジア・トルコは無殘にも遂に英佛の分割するところとなつた。即ち紅海の入口にあるヘヂヤズは獨立の名によつて英國の勢力範圍となり、そしてパレスタインとイラクが委任統治の名によつて何れも英國の保護國となつた。それと同時に、シリヤもまたフランスの保護國となつた。斯くの如英國はヘヂヤズ・パレスタイン・イラクといふ具合に、牛肉ならばロースともいふべき部分を殘らず手に入れ



バクダード市

た。それに比べると、フランスの收穫はシリヤだけで、いはゞお餘り頂戴といつた形である。それでもフランスは收穫があつたからいいが、ギリシヤに至つては、全然英國のお先棒に使はれたに過ぎなかつた。要するにトルコ相手の取引においては、英國は當り屋の大將で一番莫迦を見たのはギリシヤであつた。

勿論、英國が舊トルコ領内において、あれだけの收穫を收めるまでに少からぬ犧牲を拂つたことは事實である。現にメソポタミヤ方面だけでさへも英國は數十萬の軍隊を出動させた。然し英國が大戰當時、近東において兎も角も或る程度までの成績をあげることが出來たのは決して英國のみの力でない。アラビヤ人其の他の間に反トルコ的氣勢をあげさせ、巧にそれを利用したことが實に有力な原因なしてゐる。然し英國人は何時までも、そんなことを有り難いと思つてゐるほどのお人好しでない。其の證據に、英國は其の後數年にわたつて、いろいろのことでアラビヤ人の意嚮を全然無視した行動を取つてゐる。

八、名義だけの獨立國

回教徒の聖地メッカを首府とするヘヂヤズ、キリスト教徒の聖地エルサレムを中心とするパレスタイン此二つを左の手に握つてゐる英國は更に右の手に古代文明の發祥地たるのばしてイラクを握つてゐる、かうした事情の下において、近東問題の大部分が回教徒對英國の問題になるのは當然の歸結であらねばならぬ。

イラクはアラビヤ名で、戰前にあつては一般にメソポタミヤの名によつて知られてゐた。世界に於る有數の石油產地として知らるゝモスールはイラク領の北端にある。英國が此の地方に眼をつけ始めたのは約七十年前の昔であつた。それ以來、英國は窃かに機會をねらつゐた。そのうちにドイツがトルコを抱込んで、小アジアからペルシヤ灣に至るバグ

ダード鐵道を敷設するとになつたので、英國は空しく指をくはへて他人の御馳走を拜見してゐる外はなかつた。それが大戰の結果、まんまと自分のものになつたのであるから、英國としては實に此のくらゐ都合よく行つたことはない、しかも英國がメソポタミヤ攻略のために動かした軍隊は、最も多い時で英軍約十萬、インド軍約卅萬に過ぎなかつた。いふまでもなく英軍は英國人より成る軍隊、インド軍はインド人より成る軍隊である。即ち英國がメソポタミヤを手に入れたのは主としインド人の力であつた。夷を以て夷を制すといふ筆法を現代式で行つたのが取りも直さず此の際における英國の政策であつた。

英國は名をイラクに與へて、實を自分の方に取つた。イラクは英國のはからひで獨立國といふことにはなつたが、その代り委任統治の名によつて事實上英國の保護國になつてしまつた。これでは何のために獨立したのか、さつぱり分らない。イラクのアラビヤ人が『愛しと見し世ぞ今は戀しき』の嘆に堪へずして煩悶に煩悶を重ねてゐるのは無理もない。彼等は英國のためにまんまと一ぱい喰はされたのである。然し純樸なアラビヤ人は、そんなこととは夢にも知らなかつた。彼等にいはれるままに英國と條約を締結した。此の條約はもとより英國本位の條約である。此の條約によつて最も多く利益を收めるものはイラクでなくて英國である。

英國の手はイラクのあらゆる方面に及んでゐる。政府の顧問も英人である。政府と特別の關係ある會社の重役も英人である。軍隊の教官も英人である。學校の教師も英人である。それにイラクにはいまだに、約六七萬の英軍が占領軍のやうな形で要所、要所に駐屯してゐる。然しそれでもイラクでは軍隊と住民との衝突が絶えない。そして壓迫が加はれ加はるほど住民の反感がだん〳〵たかまつて來る。

九、變つた押しかけ婿

イラク王フエイサンは餘ほど前から大分健康を害してゐた。

それかため彼はヨーロッパへ行つて名醫の珍察を受ける目的で八月上旬バゾードを出發した然し國民は王の外遊に對し非常に冷淡であつた出發の當日彼を見送つたものは若干の英國人たけであつたそれは何故であつたか。

元來フエイサンは生れながらのイラク人ではない、彼はアラビヤ生れのアラビヤ人でイラクには緣と由緒もない人間である。それが天降り的にイラク王位に就くことになつたのであるから、うまく行くはづがない彼が即位の當日から今日に至るまで國民の間に人望のない王として終始一貫して來たのはこれがためである。世界に於て最も多くの外國の皇族を輸入して王としたのはバルカン諸國であり。ギリシヤと、ブルガリヤも、ルーマニヤも悉くそうである。そしてその結果は多くは失敗であつた。此のことは英國も十分承知であつた、然し英國は、その把持する對アジヤ政策から割出して遂にフエイサルをイラクに押しつけた。

アラビヤのヘヂヤズは英國の尻押しで、兎も角も獨立國になつた。

このヘヂアズ王國において最初の王になつた、ハツセンの子が即ちイラク王になつたフエイサルである。つまり英國はアラビヤのヘヂヤスを勢力圏内におくだけでは、滿足が出來ずアラビヤの地續きのイラクまで勢力圏内におく目的で、わざわざアラビヤ種をもつて來て、それをイラクに植えつけ樣とかゝた以外なうまいずるい事は此上なしだが、形勢をこゝまで導いて來た手際には感心させられる。

然しイラク人は最初から王の天降りには不同意であつた獨立を得たのは有難いが、英國のため道具に使はれることを

知りつゝつフェイサルを最初の王として迎へる事は御免こうむりたいといふ意見であつた。これはイラク人としては實に尤もな主張である。然し英國はそんな事には頓着せず豫定の如くフェイサルを輸入して、いよ〳〵イラクの王位につけ樣とした親英派の大臣セイツドタリブが憤然起つてフェイサル擁立に反對したのは此時であつた。

此際における英國官憲のタリブに對する措置は全く非人道的であつた。英國官憲はある日最高委員パーシー、ヨツクスの官邸に茶話會を催し夫人の名を以てイラク政府の各大臣を招待した、タリブは英國側に深きたくみのあるとは知らず他の閣員と共に出席したが、彼等は歸途英國兵のために逮捕せられ即日汽車でバスラへ送られ、そこから汽船に乘せられてセイロン島へ流された。これが親英派に對する英國側の仕打だから驚かされる。かうしてフェイサルは英國のためにとう〳〵イラクへ押しつけ婿にやられた。若しこれが昔しのバルカンであつたならばフェイサルはとうの昔に逃げ出したことであらう。彼があの樣に不人望であるに拘らず依然として王位にあるのは彼自身にとつて幸か、不幸か何れにしても彼は運命の手によつて翻弄されつゝある一人である。これはフェイサルばかりではないフェイサルを戴くイラク王國も亦然りである。

一〇、英土間の紛爭問題

今のバグダードは昔エデンの樂園のあつたところだといはれてゐる。それから何千萬年かたつて、バグダード及び其の附近を中心とする地域に、バビロンアツシリヤの古代文明が代る〳〵榮華の驕りを見せたのであつた。そのバグダードの北に問題のモスールがある。モスールはモスリン織の本場であるから、日本人にとつて、まんざら緣故のない土地でない。英國モスール間の關係は約七年前に始まる。一九一八年の秋、聯合國とドイツの間に休戰條約が成立した時

まで、英軍はまだモスールを占領してゐなつた。然るに其の年の暮になると、英軍は北進して、悉くモスールの全部を占領してしまつた。それ以來、英軍はモスルを軍政のもとにおき、その後イラク王國が創立されると同時に、モスールをイラク領に編入し、いくら督促されても、頑としてこれをトルコに還附することを拒絶して今日に至つてゐる。

モスール對する英國の遣口は、誰が見ても立派に家宅侵入であり、財産横領である。トルコの請求をまつでもなく、英國は自ら進んで、トルコに對してモスール還附を申し出づるのが當然である。然し大戰中にフランスと密約を結んでトルコ分割の計畫をたてたくらゐの英國である。英國はモスールを還附するどころか、ローザンヌ會議の時も、イラクとモスールの境界はこれを國際聯盟の決定にまかせるといふ極めて漠然たる然し英國にとつて非常に都合のいい一項を條約中に挿入することにして、まんまとトルコをペテンにかけたのであつた。其後、英土の間に話合がつかない結果として、モスール問題は結局國際聯盟によつて解決する段取になつた。そこで聯盟は昨年の一月三人の調査委員を擧げ委員はモスールへ行つて親しく實地調査を遂げた。然し委員の調査も、問題の解決に對して遂に決定的の斷案を下すまでには至らなかつた。

トルコの主張は、自分の所有物を取り戻さうといふのであるから、主張としては極めて簡單である。然し英國の計畫は先づイラク王國といふ自分に都合のいい名義だけの獨立國を創立し、委任統治の名によつて、これを事實上の保護國となし、更にその保護國の一部としてモスールを併合しようといふ蟲のいゝ計畫だけに、其の主張には何うしても幾多の無理が伴うことは免れない。

英國が萬難を排してモスールを手に入れようとかかつてゐるのは、モスールが世界における有數の石油産地であることが一つ、もう一つはモスールがアラビヤとペルシヤを支配する形勝の地位を占めてゐるからである。此の二つの理由

によつて英國は飽までモスールを獲得しようとかかつてゐる。然し英國の此の政策がアラビヤ人多數の共鳴を得ないことは、固よりいふまでもない。

十一、地の利も人の和も

一九〇八年(明治四十一年)のことであつた。ある日、青年トルコ黨によつて企てられた革命の成功を觀すべく、コンスタチノーブルにおいて、盛大な示威運動が行はれた。その時、群衆の中から突然、日本語でバンザイと叫ぶ聲が聞えた。それは果して何人の口から出でたのであつたか。當時、現場に在つて親しくバンザイの叫びを聽いたドイツ新聞記者の想像したやうに、それは嘗て日本へ行つたことのあるトルコ人の口から出たのか。それとも單にバンザイといふ日本語を覺えて、早速それを利用したのか。それは疑問である。それは兎も角、此のことがあつてから、ちやうど四年目の一九一二年(大正元年)に、今、イギリスの委任統治の下におかれてゐるバレスタインと、フランスの委任統治の下におかれてゐるシリヤの處分に關して、英佛兩國の間に秘密交渉が開始された。併し、生馬の眼を拔くものよりも、もつと機敏であるべきはずの外交家も、此の秘密を嗅ぎつけず、千里眼以上の新聞記者も、これには氣がつかなかつた。英佛兩國は、すでに此頃からトルコの分割に關して極秘のうちに協定を遂げてゐたのであつた。即ち世界戰爭の勃發する二年も前から、英佛兩國はバレスタインとシリヤをトルコから奪取する計畫をたてゝゐたのであつた。正義人道を賣物にする白人の陰險さは、此の一事によつても十分に實證される。斯くしてシリヤは大戰前において早くもフランスに割り當てられた。そして一九二〇年(大正元年)にはサン・レモ會議においていよいよフランスの委任統治と決した。換言すればシリヤといふものの實物取引が行はれたのは一九二〇年であるが、此の取引に關して英佛間に契約の成立した

のはそれより約八年以前であつた。而も此の契約は所有者である、トルコを除外しトルコの承諾なしに、英佛の間に成立した不法不當の契約であるだけに、實物取引が行はれてから既に六七年を經過した今日でさへ、シリヤとフランスの關係が依然として險惡であるのは決して不思議でない。

シリヤもイラクの如く回教徒の國である。然しシリヤはイラクほどに物質的には惠まれてゐない。のみならず山地にはモロツコのリフ族にも比すべき好戰的の種族がゐる。沙漠の附近にもフランスの統治に强烈な反感を持つ種族が集つてゐる。要するにシリヤにおけるフラスは天の時、地の利、人の和の總てを持つてゐない。實際、フランスはモロツコを持て餘してゐるやうに、シリヤを持て餘してゐる。殊に昨今のやうにドリユーズ族のために攻め立てられて、につちもさつちも行かなくなつてゐる有樣ではなほのこと、シリヤを持て餘してゐるにちがひない。帝國主義の酬いがそろ〳〵現はれて來たのである。

十二、自主權を要求して

シリヤの首府ダマスカスには、『南朝四百八十寺』の詩的の光景を聯想せしめるくらゐ多數の寺院がある。而も其の大部分は、いふまでもなく回教のモスクである。此の平和の都、わけて宗教的氣分の濃厚なアラビヤ人の此の都も、併し今はシリヤのドルーズ族とフランス軍との間に爭奪の的となり、形勢は日一日と險惡になりつゝある。ダマスカスが攻擊軍であるドルーズ族の手に落ちるにせよ落ちざるにせよ、シリヤはフランスにとつて、たしかに第二のモロツコとなつた。そしてドルーズ族の首領アトラシユ・パシヤは取りも直さず第二のアブデル・クリムである。

フランス側の公報に現はれたシリヤ人は、如何にも野蠻人若しくは半野蠻人のやうに描かれてゐる。然し事實は全然

反對である。クローマーのいつた如く、シリヤのアラビヤ人は相當高い程度の文化を持つてゐる。近代式の自治制を布いて、立派にそれを運用して行くだけの行政上の才幹をも兼ね備へてゐる。彼等を野蠻人若しくは半野蠻人扱ひにするは實に言語道斷である。

シリヤにおけるフランスの失敗は白人に共通するまちがつた優越感に原因する。論より證據、フランスはアフリカにおいて野蠻人若くは半野蠻人の取扱に慣れた低階な植民地官吏を移して、これをシリヤに配置してゐる。それもいいが、此等の佛國官吏は何れも申し合せたやうに賄賂をほしがる。金錢に淡白なトルコ人官吏、賄賂などは見むきもしなかつた舊時代の官吏のみを見慣れたシリヤ人の眼に此等の腐敗した佛人官吏がどんな具合に映ずるか。それは事新しく說明する迄もないであらう。然し飽までうぬぼれの强いフランス人は、いまだに優秀民族の誇りを鼻のさきにぶらさげてゐる。彼等がドルース族に對して自治を與へておきながら、手の裏をかへすやうに、それを取りあげたり、またはフランス人の任命したフランス人の知事がドルーズ族からさん〳〵に排斥を喰のてゐることを知りながら、そのことに就いてわざ〳〵最高委員へ陳情に來たドルーズ族の首領を追つ拂つたりなとしたことが、どのくらゐ、ドルーズ族をおこらしたか。彼等がドルース族の武力抵抗によつて、さんざんな目にあつてゐるのは自業自得である。

フランス人とドルーズ族との爭鬪は單なる地方的の出來事ではない。それはフランスの識者もいつたやうに、回教徒間における民族主義の擡頭が事件發生の根本となつてゐるのである。自主權回復は獨り支那人のみの要求でない。世界における二億二千七百萬の回教徒の、その大部分の要求するところも實にこゝにある。

十三、擡頭せる民族主義

バレスタインの首府エルサレムには一週間に三度日曜日がある。即ち金曜日は回教の日曜日、土曜日はユダヤ教日曜日日曜日はキリスト教の日曜日で、一週間に三日日曜日が續く。

エルサレムはキリスト教徒の聖地であるが。然し市民の數はユダヤ教徒の八萬、キリスト教徒の八萬五千に對して回教を奉するアラビヤ人は十萬内外で、第一位を占めてゐる。バレスタインが英國の委任統治になつて以來、世界の各地からエルレムに移住して來るユダヤ人は年々增加する傾向であるが、それでも回教徒は相變らず多數黨の地位を保つてゐる。ユダヤ人の移住が若し今のやうな趨勢で繼續するものとしたらば、エルサレムだけは其の中にはどうにかユダヤ人の都になるかも知れぬ。然しバレスタインにおける人口の九割迄はアラビヤ人であるから、今後いくらユダヤ人が入り込んだところで、これだけはどうすることも出來まい。バレスタインは何といつてもアラビヤ人の國であり、回教徒の國である。

そのアラビヤ人は世界戰爭以來英國に對して最も誠實に忠勤を抽んでた。英國はアラビヤ人の歡心を買ふためにいろ〳〵の約束をした。その中でも特別に多くアラビヤ人をうれしがらせたのは、總てのアラビヤ人に獨立を與へるといふ約束であつた。此の約束を信じて、アラビヤ人は戰爭當時勇躍して、第一線に立つた。英國が近東においてトルコに打ち勝つことを得たのは、斯うして勇敢な協同者があつたからである。

然らば英國はアラビヤに對して果して何ものを與へたか。成るほど與へたは與へたにちがひないが、然し要するに、それは獨立の名義だけに過ぎなかつた。ヘヂヤスにしてもイラクにしても、その背後に在つて、これを操つてゐるのは英國である。それでもイラクやヘヂスは兎も角も獨立國になつたからいいが、バレスタインに至つては、いまだに獨立といふ美しい空名さへも取り得ないでゐるといふ情けない有樣である。如何に純朴なアラビヤ人でも、かうなつては默

つてゐられなかつたと見えて、一九二二年には委員を擧げて、これを國際聯盟と英國政府に訴へた。然し彼等の努力は遂に無効に終つた。斯くしてパレスタインは今尙依然として英國の委任統治の下におかれてゐる。かうした事情からパレスタインにおけるアラビヤ人の間にも、民族主義の叫びが近來ます〳〵盛んになつて來た。そこへ英國の老政治家バルフオアが昨年の春、エルサレムに新設されたヘブリユー大學の開校式に臨むべくエルサレムへ乘込んだからたまらないアラビヤ人の怨恨と憤怒が一時に爆發して、バルフオア排斥の凄じいデモンストレーションが行はれた。エルサレムのアラビヤ人はバルフオアを迎へるのに黑枠つきの新聞と商店の閉鎖を以てした。然もそれはバルフオアのエルサレム滯在中、數週間に亙つて行はれた。さすがのバルフオアも此の御馳走には閉口した。

バルフオアが最も苦い經驗を嘗めたのは、エルサレムを引揚げてシリヤやダマスカスに行つた時であつた。數千の群衆は彼の泊つてゐたホテルに押しかけて、不穩の形勢を示した。彼はほうほうの體でダマスカスを逃げ出した。シリヤにおけるバルフオアの此經驗は然し英國の上にも、フランスの上にも、やがては廻つて來る運命の前兆である。

十四、國際上の水平運動

回教徒の世界は永いあひだ靜の世界であつた。それが大戰後、急激な變化を起して動の世界になつた。これは何といつても、近來の世界的一大事件である。殊にその變化が一時的でなく永續的である。ことは、大に注目すべき事象である。然し西方の人種的色盲患者には此の變化が果して有りのままに眼に映るであらうか。假りに有りのままに眼に映るにしても、それが彼等の心理に果してどんな變化を起さしめるであろうか。

實のところ彼等はひどく回教徒を恐れてゐる。それでゐながら、彼等は今尙ほ依然として回教徒に對する態度を改め

ない。また改めやうともしない。そして彼等が回教徒に對する態度を改めない限り、回教徒もまた彼等に對する態度を改めないであらう。然しこれは回教徒が彼等に對してこと更反抗的態度をとるのでは決してない。白人の横暴壓迫に對する自衛の手段として已むを得ず積極的態度をとるまでである。論より證據、英國はイラクとパレスタインに於て、フランスはモロッコとシリヤに於て何れも盛んに回教徒の反感をそそり若しくは回教徒の反抗を招くやうな行動を取つてゐる。そして回教徒が不平滿々、已むを得ずして少しく積極的な行動に出ると英佛は彼等に臨むに直ちに劍と砲とタンクと爆彈を以てする。これが白人の帝國主義的國家回教徒に對する僞りのない態度である。然し彼等が回教徒に對して壓迫を加へれへば加へるほど、彼等に對する回教徒の反感と反抗はだんだん昂まつて來る。回教徒が白人の帝國主義的國民に對して一大脅威になつたのは白人自らこれを招いたのである。此の原因にして除かれない限り、白人がもつと強烈に回教徒の脅威を感ずる時は必ず來るであらう。もつとも、白人に對する回教徒の要求は必ずしも一樣でない。例せばシリヤの回教徒は獨立を要求してゐるが、西アフリカの回教徒に至つては單に參政權を要求してゐるに過ぎない然し獨立の要求にしても、若しくは參政權の要求にしても、其の根抵には何れも民族自決の思想が潜在してゐる。そして、回教徒の要求は不自然な要求でも、不當な要求でもない。彼等の要求は寧ろ最小限度の要求である。換言すれば彼等の要求は國際上に於ける永平運動である。それ以上でも、それ以下でもない。此の思想は總ての回教徒の持つてゐる思想である。此の運動は總ての回教國に起りつゝある運動である。此の思想が事實の上に具體化するまでは、此の運動が首尾よく成功するまでは、回教徒の世界には、まだ〳〵いろ〳〵のことが起るであらう。そして其の度ごとに、白人はだん〳〵脅威の侵迫を痛切に感するやうになるであらう。問題は回教徒の民族的覺醒でなく民族的に覺醒した回教徒に對する白人の態度である。回教徒はすでに白人を發見した。白人は何時、回教徒を發見するであらうか。(終り)

編輯後記

◇

從來の營業所が、狹猛の爲め、本月二日に表猿樂町三番地に移轉しました。今までの營業所から、目と鼻の距離、神保町電停より五丁程の所です。御上京の節は是非共御立寄下さい。

本號は吉江先生の『現代日本文明と藝術』と題する御講演を出すべく既に印刷所にまわした所、職人の手落ちから紛失致し、仕方なく、豫定をかへました。從つて、發行日が少々後れた事を同氏及會員諸氏に御わびします。

◇

國民新聞社外報部長伊藤龜雄氏が御忙しい御時間を特に本社の爲に割愛して戴いた御厚意に對して滿腔の敬意を捧げる次第であります。御蔭で本號は內容の充實した有意義のものが出來ました。

◇

講演部設置を發表するや、各地からの申込多く、其日割を定めるのに迷つて居る次第です、差當り本月廿二日に新潟縣南蒲原郡中條小學校と北魚沼郡須原小學校と、廿七日午后一時から愛知縣岡崎市公會堂で本社主催講演會を開催する事に決定しました。講師は池田林儀氏、同氏が自己の主義主張の爲に、御奮闘される意氣には感激の外ありませぬ。同地方の會員諸氏は奮つて御出席下さい。

◇

久しく病氣で居た中田社員も、愈々元氣恢復、目下廣嶋方面にて大活動、中上社員は其一黨を率いて、新潟方面に大活躍、祖根、籾井の少壯組は岡山方面を、加藤、勝目兩社員は三重方面、南社員は兵庫、年少有爲の瀧君は山口と云ふ工合に奮闘しつゝあります。心ある同地方の方々に御聲援を御願ひ致します。

臺灣支局の蜂須賀君は鹿兒嶋出身、著々と同嶋に本社の大使命を宣傳しつゝあります。

◇

「時は來るであらう！」この一句を口誦しつゝ、我が社員は獅子奮迅の努力を拂ひつゝあるのであります。

（一九二六―一一―信世生）

◀次號豫告▶ (十一月廿日發行)

婦人の坑內勞働問題　市川房枝女史

大正十五年度既刊の部

一月十日	政治經濟の改造	小林丑三郎氏	
一月廿日	勞働問題に就て	河田博士	
一月卅日	婦人運動と現行法律	宮本英雄氏	
二月十日	社會教化機關としての圖書館	藤井健次郎氏	
二月廿日	神秘の日本(上)	ジユリアントストリー氏	
二月廿日	同(下)	同氏	
三月十日	土地國家管理論	ロイドジョージ氏	
三月廿日	經濟生活の根底(合版)	太田正孝氏	
四月十日	制度と人的要素	高原操氏	
四月廿日	知識勞働者の團體組織(上)	マクドナルド氏	
四月卅日	同(下)	同氏	
五月十日	生活文化の悲觀樂觀	池田林儀氏	
五月廿日	農村問題の思想的背景	河田嗣郎氏	
五月卅日	大教育家サンダースン	ウエルズ氏	
六月十日	ホキトマンと近代思想	野口米次郎氏	
六月廿日	教育の理想と實際	小原國芳氏	
六月卅日	我國勞働問題の解決	添田壽一氏	
七月十日	哲學の實際化	尾關栗洞氏	
七月廿日	政治と演劇	ウイルヘルムウイドマン氏	
七月卅日	猶太人問題に就て	今井三郎氏	
八月十日	貧乏を救ふ道	賀川豐彥氏	
八月廿日	青少年訓練と公民	軍務局長阿部信行氏	
八月卅日	土地問題解決の理想案	ムレー氏	
九月十日	精神病者の問題	式場隆三郎氏	
九月廿日	優生學的社會改造運動	池田林儀氏	
九月卅日	社會改造の心理學的考察	バトリック博士	
十月十日	農民思潮と農村問題	太田利一氏	
十月廿日	性病豫防に就い て	栗本庸勝氏	
十月卅日	國際金融の問題	青木孝義氏	
十一月十日	回教徒の新世界	伊藤龜雄氏	

學藝講演通信社パンフレツト

會員規定

體裁　菊版二十頁內外にして毎月三回發刊す。

頒布方法　會員組織とし、會員のみに頒ち、絕對に分冊販賣せず。

申込　申込書に記名捺印し、一ヶ年分の會費前納とす。

會費　特別賛助員は一ヶ年金五十圓とし、普通會員は一ヶ年六圓とす。

講演　本社主催の講演會に、會員は無料入場する事を得ると共に、會員は其主催に係る講演會の交渉を本社に依賴することを得。

大正十五年十一月五日　印刷
大正十五年十一月十日　發行

學藝講演通信社パンフレツト

發行編輯兼印刷人　嘉手苅信世

發行所　學藝講演通信社
東京市神田區表猿樂町三
電話神田〔25〕1464番
振替東京二五一一〇番

印刷所　學藝講演通信社印刷部
東京市神田區表猿樂町十九

支局　秋田支局・廣嶋支局・臺灣支局
靜岡支局